● 読書感想文コンクール　中学校の部 ●

市長賞

丸山　佳乃（まるやま　かの）　陵南中 ２年生

作品名：舟を編むを読んで～心をつなぐ言葉～
図　書：舟を編む

「（俺は）何を考えているのかを人に説明するのがうまくない。」

辞書を作る彼が、なぜこの言葉を言ったのか、最初、私は理解できなかった。技術が進歩する中で、私達はいろいろな方法で言葉を伝えることができるようになった。会話や手紙のやり取りに始まり、電話が生まれ、携帯電話になり今では、パソコンやスマホからインターネットを通じて、世界中の人とコミュニケーションできる。

しかし、便利な道具が増える一方、その中で使われる言葉は、若者を中心に奇妙な略語や何でもワンパターンの表現で済ましがちだ。まして、自分の本当の気持ちを適確に伝えられる言葉を持つ若者がどれ程いるだろう。「本当はこうしたい」、「こう思う」という気持ちを私を含め、多くの中学生が伝えたい相手に上手く伝えられずにいるのではないか。いつの間にか、私は「舟を編む」の主人公と自分を重ね見ていた。

この本の主人公馬締（まじめ）光也は、口下手で自分の思いをうまく表現できない、不器用な性格の持ち主だ。いつも周りからは「変なやつ」という目で見られ、自分が心を開いているつもりでもなかなかうまくいかない。そんな日々の繰り返しで、本当の気持ちを伝えられない、という事実を馬締自身諦めとともに受け入れている。そんなある日、突然、辞書編集部への移動を命ぜられる。そこには辞書作りに対し執念と言えるほどの情熱を燃やす、先輩編集者の姿があった。言葉は常に生まれ、変わり続ける。新しい言葉、意味の変わる言葉、そして使われなくなり死んでゆく言葉。辞書作りは、今を生きる言葉の一つ一つをしっかり見つめ、最も相応しい意味を与えていく作業だ。こうして編まれる辞書は、私達の思いを誰かに正確に伝えるための羅針盤であり、世の中に溢れる言葉の海を渡っていくための舟でもある。馬締はそんな舟を編むため、情熱を持った人たちと出会い、いつしか仲間と呼びあえる存在になりたいと思うのだった。

私はこの本を読んだ後、久しぶりに辞書を引いてみることにした。棚の奥にしまってあった辞書はくたびれていたが、ページをめくるたび、「舟を編む」の物語で描かれた揺れ動く言葉をしっかり抱き止め定着させる作業を想い、その重みが胸に響いた。

私は今まで言葉を大切にしてきただろうか。言葉を伝えることに手を抜き、自分の真意を届けることをどこかで諦めていたのではないか。馬締のことを少しも笑えない自分がいる。

私は積極的な性格で周りの人と打ち解けるのも早い方だ。教室の隅にいる人でも自分から話しかけ、皆で一致団結し、一つのものを作り上げることが大好きだ。そんな私の性格とは真反対の馬締の性格はどこか掴みにくい。（もっと自分から話しかければいいのに。何を怖がるのだろう。）しかし、馬締は変わる。性格や見た目が突然変わったわけではない。不器用ながらも仲間と「つながりたい」「伝えたい」そして「皆とよい辞書を作りたい」という思いが彼の行動を変え、周りの人の心も揺り動かした。彼の真摯な思いが確かな言葉となり、周囲の人々に広がっていった。よい辞書を編もうとする馬締の熱意に応えようとする人々の心が輪を作り、孤独だった彼の周りは、いつしか多くの人の笑顔で溢れていた。

私は最後のページを読み終え、ゆっくりと本を閉じた。いくつもの想いが無数の言葉となって流れていくのを感じながら、私もまた彼の思いに心を動かされていたことを自覚する。自分の考えを一生懸命説明しても上手く伝えられないことはたくさんある。そのたびに悩んで苦しんで自分が手を伸ばしても相手の心には届かない思い、泣いた日もある。それでも私は誰かとつながりたいと思う。一歩を踏み出せば見えてくる世界もある。言葉を交わし、人とつながることで嬉しい時の喜びは何倍にもなる。この本は私に教えてくれる。“繋がれないなんてことは絶対にない”

大事なことは、言葉を単なる知識として知るだけでは、本当の気持ちをうまく伝えるようにはなれない、ということだ。届かない、伝わらないと言葉の海でもがき、努力しながら、他人との関わりの中で私達は本当の言葉を見つけてゆく。話すことが得意な人も苦手な人もそれは変わらない。誰もが同じなのだ。

「舟を編む」は私に言葉の大切さ、仲間とともに情熱を持ち何かを成し遂げることの素晴らしさを改めて教えてくれた。これからは、言葉の意味一つ一つを大切にし、「本当の自分」を伝えることができる言葉を持ちたいと思っている。本当の自分が伝わらなかったらどうしようと思い悩み立ち止まるのではなく、どこまでも広がる言葉の海を力強く泳ぎながら、「私」を表現する言葉を必ず見つけたいと思う。